

宿縁

一月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派 **中原寺**

TEL 〇四七—三七二—〇二九二
FAX 〇四七—三七二—〇二六二

苦が また一つの 世界をひらく



新年早々、昨年のうちから講師を依頼されていた引きこもり当事者家族支援セミナー「寺子屋ふぁみりあ」(会場、築地本願寺)の会合に伺わせて頂く縁がありました。
参加者は引きこもりの家族を抱えて悩む親たちです。引きこもりと聞くと、不登校など子供に多いと思われがちですが、昨今では特に30代から40代にかけての働き盛りの世代や、家庭を持つ大人の引きこもりが増加傾向にあると聞き、その背後に現代の複雑な世相があることを改めて知らされました。

会社からのリストラ、職場の人間関係の悪化、就職活動がうまくいかないといったことから、自分が社会に必要とされていない、自分は価値のない人間だと思いついてしまふといったパターンも多いかもしれません。いずれにしても本人の苦しみとその家族の悩みの深さは当事者でなければ思い知ることはできません。

人間をモノ扱いしてしまった生産性第一主義と消費経済社会、煽りの文化ともいえる人間万能主義の驕りに染まった生活様式は、益々対立と格差社会をひた走っているといえます。そしていつの間にか、みんながその構成員になり、同時に犠牲者になっているように思います。

このことに気付いたら、一人の考えが一人の行動を生み、少しずつでも広がって、やがて狂った社会を矯正していくことに望みをつないでいきたいものです。そして今身近な問題として、わずかな針の穴からでもひきこもりの当事者やその家族に光が見えてくることを願うばかりです。

今から十年前にその一生を終えられた仏教詩人に有名な坂村真民(さかむらしんみん)さんがいます。その言葉には、詩道一筋に精進を重ねた詩人であるからこそ、人の心に響くものを感じさせます。人は悩んだり苦しんだりしているときこそ一つの言葉に感動し、多く励まされるものです。

「念ずれば花ひらく」

念ずれば 花ひらく
苦しいとき 母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった

そうして そのたびわたしの花が
ふしぎと ひとつ ひとつ
ひらいていった

この代表的詩が生まれたのは、四十代のことだそうです。教師の傍ら、短歌の研究者になりたいたと借金までして専門書を蒐集していた真民さんが、詩に転向するのは「真の人間として生きたい」と願うようになって、仏教への道を求め尋ねました。座禅をとおして、厳しく自分の生活を律し、勉強にも励む中に、仏典の中に「疑えば花ひらかず、信心清浄なれば花ひらいて仏見たてまつる」の言葉に出会いました。

小学校校長の長男として生まれた真民さんは、何の苦勞も知らずに幼少期を送っていたといえます。ところがその父親が若くして突然に亡くなったことで、家の生活は一変します。「五人の子供を自分の手で育てる」と譲らなかつた気丈夫の母親のおかげで、一家は離れ離れにならずに済みましたが、待っていたのは貧しい生活でした。

当時八歳だった真民さんは長男として母親を助けるために、畑を借りて蕎麦をつくったり草鞋を編んだりして生活の足しにしたといえます。普通であれば小学校までというところを阿蘇の火を見て育った気概を持つ母親は中学、高校まで行かせてくれたのでした。苦しみなながらも 愚痴一つ言うことな

く、「念ずれば花ひらく」と唱えていた母親の姿が甦ってきたとき、この詩は生まれました。母親の恩に報いたいという深い思いが、詩一筋の道を歩き続けるといふ、真民さんの生きかたを決定づけたといえます。

詩を作る胸の内には常に一つの「ねがい」がありました。「ねがい」と題した詩の冒頭では「一人のねがいを 万人のねがいに」と詠んでいます。最初は「何とかして自分を真の人間にしたい」「これだというものを掴みたい」という思いが強く、それが仏教に入るきっかけにもなりました。がその合わせた手を自分のためだけでなく、人のためにも合わせるようになり、虫や花にも、そして最後は宇宙へと向けられていくのは、「誰にでも手を合わせられるように」「何にでも呼吸を合わせられるように」との念い||念ずるに変化していくのは「四弘誓願」といふ仏の教えにある第一の誓願「衆生無辺誓願度(しゅじょうむへんせいがんど)」を受けてのことで、「度は渡である 一切衆生を彼岸に渡すことである 度に生きる」

苦しみの世界で生きる力を失っている一人でも多くの人たちに、詩をとおして生きる力を与えて、喜びの世界へ橋渡ししたい。「度に生きる」、これこそ坂村真民さんが貫きとおした一念でした。

「どんな小さな花でもいいから、自分の花を咲かせよう」

それが万人への「願いに生きる」仏の誓いであり、そこに気づかされたところに自ずと生まれる我が念(おも)いこそ「念ずれば 花ひらく」との確信ではないでしょうか。

【寺灯雑記】

○壮年会主催の年末懇親会を楽しむ

12/20

壮年会の例会のあと夕方6時から年末懇親会が婦人会の人たちも参加して松戸二十世紀が丘にあるお店で催うされました。

36名の参加者は賑やかにカラオケやおしゃべりを大いに楽しみました。

○行く年に感謝して清掃奉仕

12/28

歳末の忙しさをますなかをご門徒の有志6人が朝からお寺の清掃奉仕をしてくださいました。

男性は主に山門から本堂への参道、石段、前庭等をホース、たわし、洗剤を使っての水仕事。女性は会館、客殿等の内部清掃の仕事です。

お聴聞の場所への一年の感謝を込めた毎年師走のご奉仕、例年より少ない人数でしたが有難うございました。

○清々しく元旦修正会に参拝

1/1

暮れから穏やかで暖かな天候に恵まれて迎えた新年の行事、元旦修正会が朝8時から鐘が打ち鳴らされるなか多くの参詣者とともに始まりました。

ご住職の第一声「帰命無量寿如来」に続く参詣者の正信偈の読経は清らかな唱和となつて静寂な境内に響き渡りました。

年頭の法話は前住職から。親鸞聖人の和讃の一首「いつつの不思議をとくなかに 仏法不思議にしくぞなき 仏法不思議というこ

とは 弥陀の弘誓になづけたり」を引かれ、世の中で不思議と思うことがあるなかで、人知の遠く及ばない、言葉で表したり、心でおしはかたりできない仏法の世界こそ不思議であり、その仏法とは凡夫が仏にしてみらう念仏の救いをいうのだとお話になりました。

考えてみると、人間の能力で何とか生きられるとの現代人の在り方は、ますます仏法から遠ざかり末法の道を歩んでいると言わざるを得ません。しかしそのことに少しでも気づかせていただくのは仏さまの教えに出遇っているからです。本当に不可思議なそれぞれの仏縁に導かれてのことです。この一年の計、聴聞の場を大切に相続したいものです。

ご法話のあとは、恒例のご流盃で新年を祝し、ご住職からの挨拶があつて、名物のお雑煮をいただきながらお互いに新年の挨拶を交わしました。

○第8回のちの居場所を考える会

1/8

学会において「場の思想」で知られる、場の研究所所長清水博(東大名誉教授)氏を中心とする地域住民の集まり「いのちの居場所を考える会」の第8回目が14名が参加して聞法会館で開かれました。

この会は、場の思想を理論として現代社会のありかたといのちを捉えなおし、地域において具体的なつながりを持つべきことを目的に一昨年から当寺を会場に二カ月に一度の割合で開かれています。今回から当寺門徒の河南さんが司会を務

め、参加者からの様々な観点からの「いのちの場について」意見や感想をもらいながら清水氏の助言や考えを聞きました。科学からの「いのちの循環」とか「いのちの与贈」という提言は、興味深いものです。今回は3月10日(木)10時半から。どなたでも参加自由です。

○今年の婦人会新年会は「饅頭こわい」

1/9

28年度仏教婦人会総会が開かれました。いつもどおり総会に先立ち「親鸞聖人ご正忌法要」が勤められ、坊守さんが代表して焼香されました。

総会では宇佐美千枝子さんの司会で、27年度事業報告、会計報告がなされ承認されました。次いで2年を一期とする役員改選があり、今年度からの新役員の選出となり新体制案が出されて可決承認を得ました。

これまで会長を三期6年間つとめた前田奈美恵さんが退任、新しく本間芳子さんが新会長に就任しました。

退任にあたって前田さんは「皆さんに支えられて何とか無事につとめることができました。」と挨拶。また新会長の本間さんは「お寺との長いご縁を思いながら、お聴聞に励みつつご協力いただき婦人会の運営をしていきたい」と挨拶、ご苦労いただいた前田前会長に婦人会から記念品を贈りました。

尚、副会長に小泉夫佐子さんと井上好子さん。千葉組みのり会への代表に田中和子さんが就任、また初めての理事に伊藤昭代さん、長谷川春美さん、山本由美子さんが加わりました。

新役員のもとで28年度事業計画案と予算案が発表され、一部規約についての提案事項がありました。可決承認されました。

総会終了後は会館に移動して賑やかに新年会を催しました。宴会では前田奈美恵さんと水澤幸子さん共演であでやかに日本舞踊を披露。花田淑枝さんは詩吟を朗々と吟じ拍手喝采を浴びました。さらに毎回期待が高まっている？前住さんの落語は、立川談志の弟子と名乗って「立川美談志」の名前で「饅頭こわい」の演目でご機嫌をうかがいました。色襟までつけて和服姿での登壇に会場は一瞬どよめきと笑いに包まれました。

参加者は33名、そのほか今回は壮年会から2名が参加しました。

【法座・行事の案内】

○常例法座 一月十七日(日) 一時

○門信徒会役員会 講師：脇本正範師

○門信徒会役員会

一月十七日(日) 二時半

○壮年会総会・新年会

一月二十四日(日) 二時半

○和讃に学ぶ(高僧和讃)

一月三十日(土) 三時

○婦人会法座

二月六日(土) 一時

○壮年会法座

二月十一日(祝) 三時

【一月の掲示板のことば】

なにもかもが

阿弥陀さまからの いただきもの